児玉源太郎生誕の地公園

（公園駐車場４台あり）

平成 27(2015)年に整備されたこの公園は、児玉家代々の屋敷跡（その後、児玉文庫となる）の一部です。

■児玉源太郎産湯の井戸

●「児玉家屋敷跡」（標石）

●「児玉大将産湯之井戸」（標石）

児玉源太郎は、嘉永 5（1852）年閏 2 月 25 日に、この地にあった屋敷で生まれました。当時の井戸が保存されており、井戸の傍に「児玉大将産湯之井戸」の標石があります。

源太郎の父・半九郎の死後、安政 5（1858）年に浅見栄三郎の次男、次郎彦を迎えて家を継がせ、次郎彦は源太郎の姉・久子と結婚しました。

幕末の徳山藩内では、萩の本藩と同様に、幕府を支持する派と朝廷を支持する派に分かれて争いました。次郎彦は、朝廷を支持し勤王を主張する一人として活動したことから、元治元（1864）年 8 月に屋敷の玄関で暗殺されました。

次郎彦の死後間もなく、児玉家は藩命により家名断絶、屋敷は没収されました。

のちに源太郎がこの屋敷を買い戻し、私設図書館「児玉文庫」を開設しました。

児玉文庫　＜詳しくはこちら＞　→　周南市立図書館のホームページへ

児玉源太郎は、明治 30(1897)年に英照皇太后の葬儀の任にあたり金三百円を下賜されたことから、郷里の後進育成を願い、私費を加えて徳山に私立図書館「児玉文庫」を開設することにしました。生家跡を買い戻すとともに蔵書を集めて文庫を開設し、敷地内には次郎彦の記念碑を建て、井戸も残しました。

明治 36(1903)年 1 月 23 日、公務で台湾へ向かう途中で徳山に立ち寄り、開庫式において設立の趣旨などの演説をしました。

■「児玉文庫開設百周年記念碑」

児玉文庫開設百周年にあたる平成 15(2003)年、有志により建立された記念碑です。

児玉文庫の敷地内には、かつて記念碑や記念樹が多くありましたが、昭和 20（1945）年に太平洋戦争中の空襲で文庫が焼失し、その後、記念碑の多くは児玉神社に移設されました。

現在、いくつかの標石とこの記念碑が建てられています。

産湯の井戸周辺に、３つの標石が残されています。

●「贈従四位児玉次郎彦君遭難之跡」（標石）

児玉文庫開設に併せ、源太郎が、義兄・次郎彦の偉績を記念するため義兄が遭難した場所に建てた石碑です。

●「東宮殿下行啓記念樹」（標石）

明治 41(1908)年、皇太子(後の大正天皇)が児玉文庫に行啓されたことを記念し、小賀玉を植樹した場所に建てた石碑です。

●「皇太子殿下侍従御差遣記念樹」（標石）

大正 15(1926)年、皇太子(後の昭和天皇)が徳山行啓の折、児玉文庫に侍従を派遣されたことを記念し、月桂樹を植樹した場所に建てた石碑です。

中央図書館

図書館駐車場あり。近隣に市役所駐車場あり

■児玉文庫・児玉源太郎資料コーナー

平成 31(2019)年、周南市立中央図書館は、児玉文庫にちなみ愛称を「児玉文庫メモリアル」と定め、源太郎が故郷に託した志を引き継ぐこととしました。

館内には展示コーナーを設置し、文庫ゆかりの品や写真などを展示しています。

児玉神社とその周辺

神社駐車場あり。近隣に市役所駐車場あり

■児玉神社

児玉源太郎を祭神とする神社です。
江の島の児玉神社から分祀し、源太郎の旧宅跡に創建されました。
大正 11(1922)年、徳山町長ほか 52 名が出願して、翌 12(1923)年に認可されました。

神社の参道西に２つの標石が残されています。

●「児玉将軍旧邸宅」（標石）

元治元(1864)年、児玉家は家名断絶となり屋敷を没収されました。翌年、藩論の転換により児玉家が再興した際に、源太郎が拝領した屋敷の跡地を示す標石です。

●「勤王七士之碑」（標石）

義兄次郎彦ら徳山七士碑があることを示す標石です。

■タイワンゴヨウ（マツ）

大正 14(1925)年、児玉源太郎を称える記念樹として台湾から幼木数本を取り寄せ、児玉神社の境内に植えられました。当時は樹高約２メートルであったと伝わります。
太平洋戦争後の都市計画による道路の拡幅に伴い伐採する話が出ましたが、そのまま残すことになり、現在大きく成長しています。道路はこの部分だけ狭くなっています。

■「徳足以懐遠」碑

児玉源太郎が台湾総督を務めた際の民政局長・後藤新平の揮毫による石碑です。「徳足以懐遠　正三位勲一等男爵後藤新平書」と記されています。

碑の側面には「大正十年七月建之」とあり、裏面に「徳山両船町出雲講中」と記され、碑の建立に関わった東船町・西船町等の人たち 24 人の名前を刻んでいます。

「徳足以懐遠」（徳足りて以て遠きを懐く）とは、児玉が大変徳のある人物であったことを示すものです。

『春秋左氏伝』僖公七年の頃に、「招攜以禮、懐遠以徳。徳禮不易、無人不懐。」（攜るるを招くには禮を以てし、遠きを懐くるには徳を以てす。徳禮易へざれば、人として懐かざるは無し）とあることによります。

境内には、かつて児玉文庫にあった多くの石碑が移されています。

●「山縣元帥の児玉大将の死を惜しまれたる歌」碑

総理大臣などを務めた山県有朋の歌碑です。

山県が源太郎の死を惜しんで詠んだもので、かつては児玉文庫門前に建てられていました。

〔碑文〕

「山縣元帥の児玉大将の死を惜しまれたる歌

越えはまた里やあらむと頼みてし

杖さへ折れぬ老の坂みち」

●「児玉源太郎薨去の際の御沙汰書」碑

児玉源太郎の功績に対し、明治 39(1906)年 7 月 24 日に明治天皇が沙汰書を発しました。

昭和 13(1938)年、源太郎の三十三回忌にあたり、嗣子児玉秀雄がその全文を刻んだ石碑を建立しました。

〔碑文〕

「夙ニ身ヲ軍務ニ委ネ久シク力ヲ要職ニ竭シ新附ノ地ニ莅ミテハ治績大ニ舉リ帷幄ノ謀ニ参シテハ武勲維レ隆シ今ヤ溘亡ス曷ソ悼惜ニ勝ヘム宜シク特ニ祭資ヲ賜ヒ以テ弔慰スヘキ旨御沙汰候事」

〔碑裏面〕

「明治三十九年七月廿四日先考参謀総長陸軍大将正二位勲一等功一級子爵児玉源太郎公薨去ノ際賜フ所ノ御沙汰書今全文ヲ石ニ刻ミ以テ後昆ニ傳フ　昭和十三年五月男伯爵児玉秀雄建」

●「日本帝国褒章之記 児玉ヒサ褒章記念」碑

児玉ヒサ(久子)は児玉源太郎の長姉です。児玉家は父半九郎が没したとき、源太郎が幼少であったため、浅見家から次郎彦を養子に迎え、ヒサはその妻となりました。

元治元(1864)年に児玉家が一時断絶するなかで、ヒサは家計を支え、弟や妹の教育にも努め、老母にも尽くしました。

昭和３(1928)年にヒサは緑綬褒章を受章し、同 12 年に 95 歳の天寿を全うしました。その一周忌にあたり、児玉文庫庭内に建立された碑です。

〔碑文〕

「日本帝国褒章之記　山口県華族　児玉ヒサ

資性恭順夫ニ仕ヘテ勤王ノ誠忠ヲ致サシメ夫歿スルヤ困難ナル家計ヲ支持シ刻苦奮勵弟妹ノ教養ニ努メ遂ニ家道ノ興隆ヲ見ルニ至ラシメ又克ク老母ニ孝養ヲ盡シタル等志操ヲ渝ヘサルコト六十有餘年ノ久シキ終始一日ノ如シ洵ニ竒特トス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ緑綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰セラル

昭和三年六月二十二日」

●「後藤新平児玉神社参拝記念」碑

昭和２(1927)年、後藤新平が児玉神社参拝後に児玉文庫を訪れた時の揮毫を、昭和 16(1941)年に児玉文庫正門入口に建立した記念碑です。

〔碑文〕

「往事茫々都似夢　毎思家国忽思君

昭和二年四月七日　後藤新平

其ノ日伯爵後藤公児玉神社参拝ノ後我文庫ニ詣リ低徊多時感懐ニ堪ヘサルモノノ如ク一タビ辞シ去リ復返リ来ッテ之ヲ書セリ今石ニ刻シ記念ニ資ス

昭和十六年四月」

〔意訳〕「往事茫々都似夢　毎思家国忽思君」

過ぎし日のことは（もうはるか昔のことで）ぼうっとして、すべて夢のようです。

(だが)国を思うときは、いつもすぐにあなたを思い出します。

■徳山七士碑

幕末の徳山藩内では、萩の本藩と同様に、幕府を支持する派と朝廷を支持する派に分かれて争い、元治元(1864)年から翌年にかけて、勤王を訴え幕府への抗戦を主張した藩士７人が処刑あるいは暗殺されました。

児玉次郎彦、本城清、江村彦之進、河田佳蔵、浅見安之丞、信田作太夫、井上唯一の７人は、「徳山七士」（徳山藩殉難七士）と呼ばれました。

この碑は明治 21(1888)年に建立され、当初は浅見安之丞・信田作太夫・本城清が暗殺された新宮海岸近く(遠石)にありましたが、道路建設のため、昭和元(1926)年に児玉神社に移されました。

〔碑文〕

徳山七士碑

「徳山七士碑　正二位勲二等　公爵毛利元徳篆額

徳山七士者児玉次郎彦本城清江村彦之進河田佳蔵浅見安之丞信田作太夫井上唯一是也
七士慷慨憂國将有為而黨議紛亂不能果其志遂死非命雖然天定勝人寃枉竟雪則七士亦可
瞑矣頃者諸友相謀将建石慰其魂請余銘余嘗聞本城清等下獄賦詩托其友人入江石泉寄之
今録以代銘
兎盡狗烹百事空交頤血涙滴成紅可知一片勤王志惟在為仁取義中

明治二十一季十月

皇太后宮大夫兼内蔵頭従三位勲二等子爵椙孫七郎撰并書」

〔意訳〕

徳山七士とは、児玉次郎彦、本城清、江村彦之進、河田佳蔵、浅見安之丞、信田作太夫、井上唯一である。

彼ら勤王の七士は憤り嘆き国を憂えてまさに事を為そうとした。しかし党の議論が紛糾し、その志を果たし得ずして死を遂げた、それは天の定めではない。しかしながら、天が（世の中が）安定して正道に帰り、冤罪が竟に雪がれるならば、則ち七士も亦た瞑すべきである。（七士も往生するにちがいない。）

先頃有志の人々が相謀って石碑を建て、其の魂を慰めようと企画し、私に銘を請われた。私はかつて本城清らが下獄の際に詩を賦して、その友人の入江石泉に寄託したと聞いたことがある。今それをここに記録して銘に代えることにする。

兎尽き狗烹られ万事空しい、頬を濡らして流れる血の涙は滴り落ちて大地を紅く染めた。判ってもらいたい一片の勤王の志を。ただひたすら命を尽くして正義を実現せんとしていたのである。

明治二十一年十月

皇太后宮大夫兼内蔵頭従三位勲二等子爵杉孫七郎撰し并に書す

■「浩氣長存」碑

平成 18(2006)年、児玉源太郎没後百年にあたり、地元有志により建立された元台湾総統李登輝氏揮毫の石碑です。

台湾産の石に「児玉源太郎先生　浩氣長存　李登輝」と刻まれています。

「浩氣」とは浩然の気、天地間に充満している至大至剛の精気をいい、また俗事から解放された屈託のない心境のこと、「長存」とは永く存在する、永遠に存在するという意味です。

『孟子』公孫丑上に、「吾善養吾浩然之気」（我善く吾が浩然の気を養う）とあり、浩然の気は、行いが道義に合し心に恥じる所がなければ、その身に生じて不撓不屈の道徳的勇気となるとされます。

■児玉公園と児玉源太郎像

児玉神社の南に接して、戦災復興都市計画事業の中で昭和 26(1951)年に新設された公園「児玉公園」があります。

公園の一角に、平成 23(2011)年に源太郎の功績を称え顕彰するため、有志によって設置された像があります。

この像の原型は、山形県出身の彫刻家・新海竹太郎の作品で、現在、国立台湾博物館が所蔵しています。この像は同博物館の協力を得て、台湾の彫刻家・林昭慶氏により制作されました。

児玉家墓所

近隣に墓地駐車場あり

■「陸軍大将子爵児玉源太郎卿遺髪塔」

市内興元寺の隠居山墓地に、児玉家の墓所があります。墓碑三基が並び、その中央は児玉家累世の墓、向かって右側は源太郎の義兄・次郎彦と姉ヒサ（久子）の夫婦墓、左が源太郎の遺髪塔です。

なお、源太郎の墓は東京都府中市の多磨霊園にあります。

その他の碑

●「旧藩学館跡」（標石）

児玉神社と児玉公園の東隣にある徳山小学校の桜馬場に面した入口にあり、徳山藩の藩校「興譲館」跡であることを示す石碑です。

源太郎は、安政６(1859)年、８歳になると藩校の興譲館に入学しました。

徳山藩では、天明５(1785)年、七代藩主就馴の時「鳴鳳館」として創設され、天保２(1831)年に八代藩主広鎮の時この地に移転、嘉永５(1852)年、九代藩主元蕃の時に時勢に合わせ、また藩学の一層の興隆を願い名称を「興譲館」と改名しました。

●「浅見安之丞屋敷跡・児玉次郎彦誕生之地」（標石）

徳山小学校の北東２００メートルほど離れた場所にあり、源太郎の義兄・次郎彦が生まれた屋敷跡を示す石碑です。

次郎彦は、浅見栄三郎の第二子(巌之丞)です。源太郎の父・半九郎が没した際、源太郎が幼少であったため児玉家の養子となり、家督を継ぎました。

浅見安之丞は、栄三郎の長子で次郎彦の兄にあたり、次郎彦と同じく七士の一人です。

●「皇威輝四海」碑

戸田地区の桜田八幡宮境内にあり、当時陸軍中将であった源太郎の揮毫で、自然石に「皇威輝四海」（こういしかいにかがやく）と刻まれています。

明治 30(1897)年に建立され、裏面に「挙明治廿七八年戦役本村従軍者之姓名列記碑陰以為功労之紀念」とあり、戸田村から日清戦争に従軍した村民 30 名の氏名を記しています。

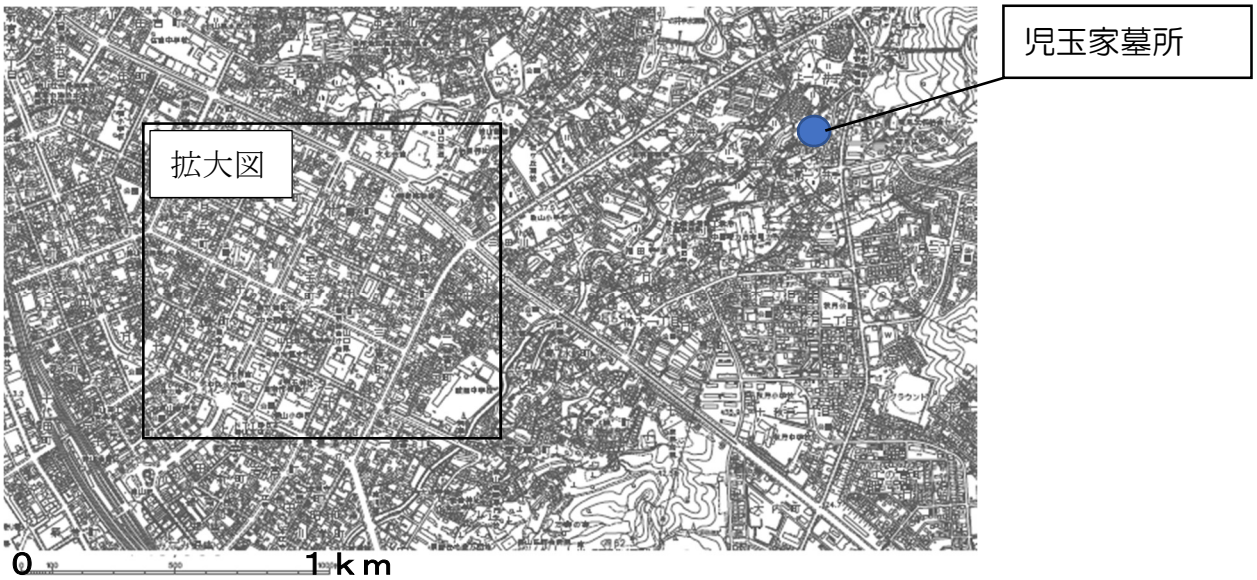
●「日露戦役記念碑」

菊川地区の加見公園の近くにあり、源太郎の揮毫で、自然石に「日露戦役記念碑　陸軍大将従二位勲一等功三級子爵児玉源太郎書」と刻まれています。

明治 40(1907)年に加見村に建立され、裏面上部に「明治三十七八季戦役本邨従軍者」とあり、その下に戦没者九人を含む、従軍した村民の氏名を記しています。また台石には発起者の氏名等を刻んでいます。

児玉源太郎ゆかりの地

文化会館・祐綏神社
（徳山藩の館跡）
至下関
児玉源太郎生誕の地公園
・産湯の井戸
・児玉文庫跡
美術博物館
至広島
中央図書館
・児玉源太郎
児玉文庫　コーナー
児玉神社
・タイワンゴヨウ
・徳山七士の碑など
児玉公園
・児玉源太郎像
周南市役所
児玉次郎彦生家跡
徳山小学校
（徳山藩の藩校跡）
至徳山駅
0
500m


児玉家墓所
拡大図
0
1km

児玉源太郎略年譜　（年齢は数え年）　※「満州」は現在の中国東北部

嘉永５年（1852）　１歳　閏２月 25 日、徳山村に生まれる。

安政３年（1856）　５歳　父・半九郎没する。

安政６年（1859）　８歳　藩校・興譲館に入る。

元治元年（1864）１３歳　義兄・次郎彦、暗殺。家名断絶する。

慶応元年（1865）１４歳　児玉家再興。元服して源太郎と名乗る。

明治元年（1868）１７歳　徳山藩・献功隊の半隊司令士として出陣する。

明治２年（1869）１８歳　箱館で幕府軍と戦う。兵部省御雇となる。

明治７年（1874）２３歳　佐賀の乱に出征、重傷を負う。岩永マツと結婚する。

明治 10 年（1877）２６歳　西南戦争に出征（熊本鎮台）。熊本城に籠城する。

明治 20 年（1887）３６歳　陸軍大学校長に就任する。

明治 24 年（1891）４０歳　ヨーロッパ各国を視察。翌年帰国して陸軍次官となる。

明治 28 年（1895）４４歳　日清戦争後の検疫事業を行う。男爵を授けられる。

明治 30 年（1897）４５歳　英照皇太后大喪使事務官を兼務する。

明治 31 年（1898）４７歳　第４代台湾総督となる。

明治 33 年（1900）４９歳　陸軍大臣を兼務する（第四次伊藤内閣）。

明治 36 年（1903）５２歳　児玉文庫開庫。内務大臣、文部大臣を兼務（第一次桂内閣）。
参謀本部次長となり、台湾総督専任となる。

明治 37 年（1904）５３歳　陸軍大将。日露戦争にあたり満州軍総参謀長となり満州へ。

明治 38 年（1905）５４歳　満州から帰国する。

明治 39 年（1906）５５歳　参謀総長となり、台湾総督を退く。子爵を授けられる。
南満州鉄道株式会社設立委員長となる。７月 23 日急逝。